考古学若手研究会 2020　第 5 回研究発表会　要旨

第 5 回研究発表会

日程：　2023 年 7 月 16 日（日）実施
場所：　Zoom

発表 1

「ネガティブ・キャストを用いた石器使用痕観察の有効性」

吉田真優[1]　　[1] 南山大学大学院人間文化研究科

本発表では、金属顕微鏡での観察に適していない石材で作られた石器の使用痕分析において、ネガティブ・キャストの観察が有効であることと、現時点での課題を示す。まず、使用実験後の Quartz/Quartzite 製石器の刃部の型をシリコンでとり、表面状態がオリジナルからどの程度型に再現されるのかを検討した。また、型同士の比較によって、個体差がどの程度あるのかを探った。フリント以外の石材が用いられる東アジアにおいて使用痕分析が可能になれば、広く人間の適応戦略や石器の機能と石材との関係を明らかにする手掛かりとなるだろう。

発表 2

「ジオシミュレーションによる初期弥生時代の人口動態」

STEPHEN BRANDON WEST[1]　　[1] 岡山大学大学院

ABM と GIS に基づいたジオシミュレーションにより、縄文時代晩期～弥生時代中期の北部九州における人口動態を検討した。渡来系移民の人数、婚姻習慣、渡来人の男女比をパラメータにし、500 年間のシミュレーションを行った。集落遺跡による人口推定とミトコンドリア DNA 研究による渡来系遺伝子の分布との一致性に基づき、各パラメータの妥当性を評価した。結果として、①渡来系移民の人数は 1 年あたりに数十人程度、数百人以上は考えにくい。②渡来系・在来系弥生人は、一夫一妻制であった可能性も十分に考えられるが、両者ともに一夫多妻制あるいは複婚であった可能性の方が高い。③渡来人の男女比は男性に偏ったという仮説を支持する証拠は十分に見つからなかった。

主催：　考古学若手研究会 2020（実行委員：中川朋美（南山大学 博士研究員）、ジョセフ・ライアン（岡山大学 文明動態学研究所 准教授（特任））
共催：　文部科学省 科学研究費助成事業　新学術領域研究（研究領域提案型）2019 年度～ 2023 年度「出ユーラシアの統合的人類史学 － 文明創出メカニズムの解明 －」A02 班・C01 班　南山大学考古・人類学セミナー「形ノ理：モノが語る物語」